霊〇新〇の献身　6

# 霊◯新◯の献身　6

**EntsCat**

**https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19772737**

モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 最霊, 芹霊

最霊です。ですが師匠総受けです。今回は本番は無しです。お好きな方はお付き合いください。

ネタバレ
死ネタ注意ではない……だと……！？（つまりそういうことです）

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

# Table of Contents

# 霊〇新〇の献身　6

「……ありがとうございました」
芹沢は客に精一杯の営業スマイルを浮かべる。
「君がここを守り続けるのは、贖罪かね？」
結界を突破して、相談所に入り込んで来た悪霊に芹沢は身構える。
「あなたは……！！」
「１人目の殺人、それを犯したのはキミだな？芹沢克也」
芹沢は最上の言葉に息が止まる。
「それを諸事情で庇ったのが霊幻新隆だ。そうだな？」
芹沢は真っ青な顔になってトイレに駆け込む。
一通り胃の内容物を吐き出して、芹沢は青い顔をして戻ってきた。
「俺は卑怯者だ」
「あ？」
「好きな人を身代わりにして、自己保身に走ってしまった。……俺は最低だ」
「君が誰を好きで、どんな人間かには、悪いが全く興味が無い。真実を教えたまえ。……いやいい。直接見せてもらおう」
最上は芹沢の精神世界に侵入した。

山の中。屈強な男性と霊幻、そして芹沢が汗を拭いながら獣道を進んでいる。
「この先の祠です」
屈強な男性が暗い顔をして林の奥を指差す。
「まだ気配はしませんね」
芹沢が霊幻に報告する。
「油断するなよ」
霊幻が額の汗を拭いながら返事をした時だった。
屈強な男性が、ポケットから大きめのバタフライナイフを取り出したのだ。
「キサマのせいで……ッ！！」
男性はナイフを構えてまっすぐ霊幻に向かう。

「っ、霊幻さんッ！！」
本気の殺意に、芹沢の忘れていたはずの、教え込まれた反射が出てしまった。
敵意を感じたら、思いっきり殴る。
昔よりも強力に育っていた超能力は、名刺を鋭い刃に変え、容赦なく男性を切り刻んだ。
「しまっ……！！」
芹沢が慌てて超能力を解いた時にはもう、男性は事切れていた。
「……これは正当防衛だ。△△さんは私有地の山の中で俺を殺したら、芹沢も殺して埋めるつもりだったんだろう。だが……」
霊幻は唇を噛む。
「やりすぎました。霊幻さんに危害が及ぶ、と思ったら、力が入りすぎちゃって……ッ」
秘めていた愛が、暴力に変わってしまった。芹沢は項垂れる。
「……ヨシフさんに相談します。これは超能力による殺人だ。たぶん、厄介なことになります」
芹沢は電話をかける。

「なるほどな」

最上は呆れたような声を出した。
「なんでこう、過剰防衛というか……正当防衛が２連続するんだ、あの男は」
「色んな人に関わる仕事ですから……」

バツン、と現実世界に戻る。

「ヨシフ、と言ったな」
「……ええ」
「それがお前たちを監視している政府の役人の名前か？」
芹沢は頷いた。
「呼び出せ。聞きたいことがある」
「……分かりました」

芹沢は事務所の札を『休憩中』に変えて、電話をかけ始める。
「……すぐ来るそうです」

坊主頭の目つきの悪い役人──ヨシフは、３０分もせずに相談所にやってきた。

「アンタか、霊幻新隆について嗅ぎ回ってるって言う悪霊は」
ヨシフはどっかりと来客用ソファーに座り込んでタバコに火を付けた。
ライターを扱う手が震えている。
「そうだ。私の事は知ってくれているようだね」
ヨシフは震えを抑え込むようにタバコを口元に運ぶ。
「最上啓示。生前は政府も監視対象にしていたトップクラスの霊能力者。死後はあの影山茂夫が消せなかった大悪霊……警戒はしてたさ。悪いが相談所の外には凄腕の超能力者や霊能力者を待機、包囲させて貰っている」

あっあっあっ、と真っ黒な眼窩で最上は笑う。

「そうだ。それが正常な反応だ」
ヨシフの反応に満足しながらも、
『たこ焼き食べる？』
……何故か最上はあの無能力者の暢気な声を思い出していた。
「単刀直入に聞こう。君たち政府は、霊幻新隆に超能力者の殺人罪をなすりつけた。……そうだな？」
「……そうだ」
ずず、と最上から立ち昇る黒い影が膨らんでいく。
「芹沢克也、影山茂夫、花沢輝気……世界でも上位に位置する強力な超能力者たちだ。正当防衛とはいえ、彼等が『他人を傷付ける可能性がある』というのは、世間に公表する訳にはいかねぇんだよ」
「そのために、無実の人間を死刑にしても、か？」
ずる、べちゃ、と最上の青年の姿が崩れ、大きな黒い肉塊に変わっていく。

「超能力者が存在すると公開すればパニックになる！疑心暗鬼に陥った人々が殺し合いを始める可能性だってあるんだ！」
ヨシフはホワイトノイズの盾を展開しはじめた。
「そのために１人ぐらいなら死んでもいい、そう言うんだな？」
だが、肉塊でできた指はバキバキと鋼鉄に近い強さを持つ盾を煎餅でも砕くように破砕した。
「……仕方ないだろう……！」
ぐちゅ、ぶちゅと音を立てながら黒い肉塊がヨシフの首に絡み付く。
「腐っている」
「ぐ、う……！」
ギリギリと首を絞められてヨシフが呻く。
「キサマらはもういい。もっと善い世の中のために皆殺しにしてやる」
「ガッ、あ……！」
ヨシフが必死に喉に絡みついた肉塊を外そうとする。
「やっ、やめろ！」
芹沢が超能力で止めようとするが、最上の指の一振りで弾かれてしまった。
「れいげん……は……」
「うん？」
ヨシフの言葉に、最上の指が弛む。
「れいげんは……これを望むのかよ……！」
「！！」
シュン、と最上は青年の姿に戻った。
「そ、れは……」
「げほっ、あの優しいお人好しが、最上サンが人を殺したと知ったら、それはそれは悲しむだろうなぁ？」
「……」
最上は黙り込んでしまう。
「はっ！どいつもこいつも、アキレス腱は霊幻新隆、かよ。ちょっとした呪文だな、その名前は」
ヨシフは新しいタバコに火を付ける。

「俺個人としては、何とかしてやりたかったさ。あまりにも、理不尽すぎる。むごすぎる。だが、惨殺死体が３つ見つかり、それの全てから霊幻新隆の痕跡しか出なかった。……今の司法ではどうしようも無かったんだよ。被害者がいるなら、犯人が必要だったんだ」
ヨシフは目を落とす。
「絞首刑は苦しく無いって聞いてる。せめて、苦しまずに……そう思わないと、俺だってやっていけねぇんだよ」
はっ、と皮肉に最上は口の端を上げる。

「やったこともないのに、随分勝手な事を言うんだな」

「……！」
バッと顔を上げたヨシフは唇を震わせ、しかし、口を引き結んだ。

続